人間健康学研究，Vol. 2，61-70，2019

〔実践報告〕

学生の対人援助観に及ぼす有償 Service Learning の効果：社会福祉施設と大学の連携による Community-Based Learning

河野　　喬[1]・磯邉　省三[1]・鶴岡　和幸[1]・石田　博嗣[2]

Paid service learning improves students' attitude towards human services: A Community-Based Learning build on a collaboration between Social enterprises and Universities

Takashi KAWANO, Shozo ISOBE, Kazuyuki TSURUOKA and Hiroshi ISHIDA

Abstract

The purpose of this study is to evaluate the educational effects of paid service learning (PSL) by collaboration between Hiroshima Bunka Gakuen University (HBG) and social enterprises. A total of 43 students participated for 5 years from 2019 to 2015. The effects of PSL on students were evaluated by The Facts on Aging Quiz (FAQ), Semantic Differential (SD) Method, and Quantitative Text Analytical Method. As a result of unpaired *t*-test, PSL students had significantly higher FAQ scores than freshmen ($p<.001$). The scores of the SD method were also significantly more positive in PSL students than in freshmen ($p<.001$). As a result of the analysis of the free questionnaire description, it was shown that the learning environment of the PSL student, the relation with the staff member, and the content of the learning were good. Therefore, PSL is advisable to make it more accessible for students.

Keywords

Community-Based Learning (CBL), Service Learning (SL), practical education（実習教育）, social work（ソーシャルワーク）, attitude of human services（対人援助観）

1．背景

Community-based Learning（以下, CBL）とは,「教育課程における目標や目的を達成する手段として，地域のパートナー，教職員，生徒・学生の協働により定義された地域のニーズに相互的に 取り組む活動に，生徒・学生を参画させる」学習活動と定義されている（Cress, 2013; 佐藤，2017）。このCBLには，教室外活動，ボランティア活動，インターンシップ, サービス・ラーニング（Service Learning; SL）といった多様な形態が含まれる（Mooney & Edwards, 2001）。

2020年に予定される社会福祉士養成課程の改定において，実習時間（180時間から270時間）の拡

[1] 広島文化学園大学
（Hiroshima Bunka Gakuen University）
[2] 社会福祉法人恩賜財団済生会 支部広島県済生会 特別養護老人ホームたかね荘
（Special nursing home TAKANESOU, Social Welfare Organization SAISEIKAI Imperial Gift Foundation）

大が計画されており（厚生労働省，2019），全国的に実習教育の内容，及び方法の更新・改善が求められている。地域包括支援の担い手として，社会福祉士の役割を拡大させる方針が示されていることから（厚生労働省，2018），養成課程をもつ大学等において，今後ますますSLないしCBLの重要性が増すことが予測できる。

本学の広島坂キャンパスでは，福祉の進路を希望する学生を中心に，放課後や休日に地域の社会福祉施設等で対人援助のアルバイトを通して，実務経験を積む，いわゆる有償のサービス・ラーニング（paid service learning; PSL）を2015年より実施している。このPSL実践について，学生から収集したデータを基に，学生がPSLを経験することによって得られる効果，援助観に及ぼす影響，及び改善課題について検討した。

２．方法

（１）対象者

調査対象者は，社会情報学部健康福祉学科，及び人間健康学部スポーツ健康福祉学科の学生のうち，将来福祉専門職を希望し，在学中から医療・介護・福祉の実務経験を積みたいと希望したPSL参画学生（以下，PSL学生）である。2015年から2019年現在までの期間，延べ43名が従事した（男性：21名，女性：22名，卒業生含む）。

調査項目のうち，対象者イメージ，エイジング・クイズ，及び援助効果については，現在従事するPSL学生のうち20名（平均年齢20.8歳 ± 0.9年，実務経験平均19.2ヵ月 ± 12.3月）が協力した。

（２）実務経験

１）概要

PSLは，前述のとおり2015年度より展開されて５年目を迎えている。2014年以前にも，学生が地域の福祉施設で介護業務アルバイトに従事するという例があったが，学生個々の自己管理のもとで行われていた。学外のアルバイトであり，教員の関わりが限定的であったことから，学生が「介護の方が自分に合っている」と進路を狭く考え，社会福祉士指定科目を受講しない，国家試験を受験しない等，学業とアルバイトの両立が課題となっていた。2014年度，当時の本学１年生が「介護福祉士資格を得るために，実務経験を積みたい」と社会福祉士担当教員に相談をしたことから，主に実習指導担当教員が中心となって，教育的観点に基づき，福祉現場でのアルバイトを支援する方法について検討をはじめた。「特別養護老人ホームたかね荘」をはじめとする地元地域の社会福祉施設に所属する社会福祉士の協力を得て，2015年８月より，まず５名の学生がPSLを開始した。

学生にとってPSLのメリットは，介護福祉士国家試験の受験要件の一つである実務経験の充足に近づくことである。実務経験を有する者として認められるためには，社会福祉施設等において1095日間以上の従事期間，及び540日以上の従事日数の介護・介助業務を行う必要がある。４年間（総日数：1461日間）の大学在籍のうちに，この日数を満たし，介護福祉士実務者研修を修了すれば，介護福祉士国家試験の受験資格を満たすことが可能となる。本学では2014年度より介護福祉士実務者研修の受講支援を行っていたため，アルバイト従事日数を実務経験日数に算入できることを公益財団法人社会福祉振興・試験センターに確認し，社会福祉施設と大学間で情報共有した後，PSLは開始された。

2019年11月現在，福祉系高校（特例高校）出身者４名（男性３名，女性１名）が，このPSLを経て，介護福祉士国家試験受験資格を満たし，国家試験を合格し，介護福祉士となっている。

２）教育的配慮

PSLは，教育目的，及び学修効果に焦点を当てた社会連携を基盤とするものであるから，労働条件，学修との両立，就職活動との分離の３点について，社会福祉施設等と合意したのち，PSL学生を送り出した。

まず，労働条件の確認は，最低賃金，及び労働時間等の保護が，学生に適用されることについて

行った。次に，学修との両立は，大学生の学修保障の観点から，大学教育・行事が優先されることを確認した。例としては，施設・事業所の繁忙期と大学期末試験等が重なった場合には，大学期末試験等を優先するということであり，いわゆる「ブラックバイト化」（今野，2016）の防止がねらいであった。最後に，就職活動との分離とは，卒業後の就職を条件とした実務経験を行わないことの確認であった。いわゆる「就職活動の早期化」（文部科学省他，1997），及び「御礼奉公」（馬場・紺屋，2017）の強要とならないための教育的配慮として明確化した。

３）募集条件

学生の立場で，実務経験日数が有償で得られることは，経済面およびキャリア形成上，大きな意義がある。反面，学びの途上にあるため，その未熟さによって利用者が不利益を被る可能性がある。PSL希望学生に対しては，PSLの目的，及び送り出す学生に求める条件を事前に示し，遵守を表明した学生のみを送り出した（Table 1.）。

４）事前指導

キャリアセンターとの連携により，本学様式による履歴書の作成をとおして事前指導を行った。内容は，志望動機の明確化，有償であることによる服務上の責任についてである。加えて，人権尊重，守秘義務の順守，人生継続性の尊重，残存能力の活用，及び自己決定の尊重といった対人援助の基本理念について，実習指導担当教員のオフィス・アワー等を用い，対話型で指導した。

５）フォローアップ

PSL学生に対しては，学業と実務経験の両立，意欲の維持，燃えつきやトラブル防止のための相談支援等を目的に，2015年度後期以降，毎セメスター終盤に，「情報交換会」を開催した。実務経験の目的と意義の確認，やりがいや悩みの聴取，PSL学生同士の交流を行った。

（３）調査概要，及び項目

2019年８月に行った「情報交換会」の際に，実務経験による学生の変化を主観及び客観的に評価するため，次の項目について調査した。

１）労働環境に関する調査

労働環境の調査として，時給，週当たりの出勤日数，業務内容，継続の意思，医療・介護・福祉分野への就職意図について調査した。就職意図とは，卒業後，この分野へ就職を希望するかどうかを問うものである。「将来，この分野で働きたいと思いますか」という設題に対して，「全くそう思わない」＝１点から，「非常にそう思う」＝７点までの７件法での回答を求めた。

Table 1.　実務経験を希望する学生に示した目的，及び条件

（１）目的

１）大学における福祉分野の勉強を併せて，福祉現場での実務経験を積むことで，学びと就労の双方に対するモチベーションを高め，将来，専門職人材に成長する土台づくりを行う。

２）学びに直結したアルバイトにより収入を得ることで，社会性，及びマネー・リテラシーを身につけ，大学生活における経済的なゆとりを向上させる。

３）介護福祉士をめざす学生においては，介護福祉士国家試験の受験資格（1095日間以上の従事期間，及び540日以上の従事日数。介護福祉士実務者研修の修了）を充足するための場を提供する。

（２）条件

１）将来，介護・福祉現場で人のために働きたいと考えている。

２）学業をおろそかにせず，学業と実務経験アルバイトを両立できるよう自己管理ができる。

３）介護・福祉現場においては，「学生だから」という甘えは一切通用しないため，未熟ながらもプロフェッショナルとしての姿勢が求められることを理解している。

２）高齢者に対する知識

The Facts on Aging Quiz（以下，FAQ）は，Palmoreによって作成された高齢者に関する知識を測る尺度である（Palmore. 1977）。高齢者やエイジングに関する25の設問で構成されており，その正誤を問うものである。本研究では, 前田（1978）による日本語翻訳版を用いた。この質問紙は，高齢者分野での実務経験に従事する17名のみ分析の対象とした。

３）対象者イメージ調査

Semantic Differential Method（以下, SD法）は,「冷たい－暖かい」など反対語の対からなる評価尺度を複数用いて対象の評価を行い，ある事象の一般的な意味を量るための測定法である。本研究では，青少年の老人イメージの比較を行った鄭他（2000）の17対の形容詞を採用し，７件法によって評価した。中点である４を「どちらともいえない」とし，両極である１と７を「非常にそう思う」，２と６を「そう思う」, ３と５を「ややそう思う」と示し，回答を求めた。

４）援助効果の測定

PSLに参加・継続する動機を確認するために，援助効果測定尺度（妹尾・高木, 2003）を用いた。援助効果測定尺度は，一過性ではない，長期にわたる援助活動から得られる援助成果を扱っており，継続的な援助活動などを動機づける要因を探ることを目的に作成された尺度である。11項目からなり,「愛他的精神の高揚」,「人間関係の広がり」,「人生への意欲喚起」の３つの下位尺度で構成されている。「全くあてはまらない」= １点,「あまりあてはまらない」＝２点,「どちらともいえない」＝３点,「少しあてはまる」＝４点,「非常にあてはまる」＝５点，の５件法で評価した。

５）PSLに参加して「良かったこと」,「心配なこと」の自由記述

医療・福祉現場は多様である。併せて，学生の成長に影響を及ぼす要因は個別性があり，複雑であることから，自由記述によって，PSLに従事することで感じられた良かったこと（ポジティブ），心配なこと（ネガティブ）について記載を求めた。

（４）倫理的配慮

本研究の実施にあたって，PSL学生に口頭及び書面で，研究目的，方法，協力の任意性，及びいつでも協力を中止できる旨を説明し，協力の意向を示した学生にのみ質問紙調査を実施した。意向の確認は承諾書，及び質問紙の回収をもって行った。

（５）統計的処理

各調査項目のうち定量的データは，先行研究に基づきスコアリングを行った。SD法によるイメージスコア，及びFAQ得点については，人間健康学部新入生を対象に行った調査（河野他，2019）を新入生として，PSL学生とのunpaired *t*- testを行った。有意水準はそれぞれ５％未満とし，解析には無償の統計解析プログラムHAD version16.20（清水 2018）を使用した。

PSLの良いところ，心配なところについての自由記述は，計量テキスト分析による頻出語句，及び共起ネットワーク図を抽出した。共起ネットワークの類似度は, Jaccard係数0.2以上とし, 抽出, 及び作図には，無償の計量テキスト分析プログラムKH Coder version.3（樋口，2014）を使用した。

３．結果

（１）労働環境

PSL学生の勤務状況を，Table 2.に示す。回答者の多くが，高齢者分野に従事していた。時給の平均額は約890円（最大値1,000円）であり，調査時の2019年８月時点の最低賃金844円を上回った（広島労働局，2018）。出勤日数は週平均２～３日程度であり，１カ月当たりの収入は約33,000円であった。実務経験の平均従事期間は19ヵ月（約570日間）であり，最大値は38ヵ月（約1,140日）であった。従事日数は, カウントしていない（NA）

Table 2.　PSL学生の勤務状況, 待遇, 及び継続の意思

項目	実務経験学生（$N=20$）	
性別		
男性	7	35.0%
女性	13	65.0%
事業種別		
特別養護老人ホーム	15	75.0%
原爆養護ホーム	2	10.0%
放課後等デイサービス	3	15.0%
時給（円）	890.9	± 36.3
一週間当たりの出勤日数	2.5	± 0.7
一カ月当たりのアルバイト代	33050.0	± 16662.2
平均従事期間（月）	19.2	± 12.3
平均従事日数	165.7	± 111.2
継続の意思		
続けたい	20	100.0%
辞めたい	0	0.0%

Mean ± SD, number (%).

が多かったが，回答者平均は165.7日であり，最大値は310日であった。

実務経験の継続の有無については，20名中20名全員が「続けたい」を選択した。

（2）医療・介護・福祉分野への就職意向，及び高齢者に対する知識

医療・介護・福祉分野への就職意向について問い，PSL学生と新入生を比較したのがTable 3.である。FAQを用いた高齢者に対する知識をスコア化し，高齢者分野のPSL学生と新入生を比較したのがTable 4.である。就職意向（$p<.01$），FAQスコア（$p<.001$）ともに有意に新入生を上回った。

Table 3.　医療･介護･福祉分野への就職意向の比較

	新入生（$N=118$）	実務経験学生（$N=20$）
就職意向（range, 1-7）	3.81 ± 1.59	5.00 ± 1.69 **

*Mean ± SD, **: p<.01.*

（3）SD法による対象者イメージ

SD法による対象者イメージについて，PSL学生と新入生を比較したものがTable 4.である。スコアが高値であるほど，ポジティブなイメージであることを示す。17対の形容詞のうち，13対が有意に高値を示した。一方で,「正しくない－正しい」,

Table 4.　エイジング・クイズ得点の比較

	新入生（$N=118$）	実務経験学生（$N=17$）
エイジング・クイズ得点（range, 0-25）	12.25 ± 2.28	14.20 ± 2.14 ***

*Mean ± SD, ***: p<.001.*

Table 5.　SD法による高齢者に対するイメージ値の比較

形容詞対	新入生（$N=118$）	実務経験学生（$N=20$）
冷たい－温かい	5.07 ± 1.31	5.85 ± 0.88**
悲しい－うれしい	4.32 ± 1.09	5.25 ± 0.91***
正しくない－正しい	4.38 ± 1.28	4.95 ± 0.89
ひどい－すばらしい	4.58 ± 1.24	5.35 ± 1.09**
みにくい－美しい	4.31 ± 1.20	5.05 ± 1.00**
話しにくい－話しやすい	4.96 ± 1.43	6.00 ± 1.08**
汚い－きれい	4.44 ± 1.21	4.90 ± 0.85
病気がちな－元気な	4.04 ± 1.36	4.85 ± 1.35*
邪魔をする－手伝ってくれる	4.76 ± 1.27	5.70 ± 0.80**
悪い－良い	4.87 ± 1.17	5.55 ± 0.94*
だらしない－きちんとした	4.74 ± 1.22	5.40 ± 0.94*
暇そう－忙しそう	3.81 ± 1.56	4.05 ± 1.23
愚かな－賢い	4.62 ± 1.21	4.90 ± 1.02
遅い－速い	3.64 ± 1.44	4.40 ± 1.14*
小さい－大きい	3.67 ± 1.49	4.55 ± 1.05*
弱い－強い	3.92 ± 1.51	4.75 ± 1.12*
鈍い－鋭い	3.86 ± 1.38	4.90 ± 1.02**

*Mean ± SD, *: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001.*

Table 6．援助効果測定値

下位項目		質問項目	実務経験学生（$N=20$）		ボランティア活動者（妹尾・高木，2003）（$N=257$）	
愛他的精神の高揚（range, 4-20）	Q.1.	人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	4.40 ± 0.68	16.80 ± 2.02	4.16 ± 0.72	16.39 ± 2.85
	Q.2.	日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった	4.10 ± 0.55		4.05 ± 0.74	
	Q.3.	自分にできることで社会と関わり，人の役に立つことができた	4.25 ± 0.55		4.23 ± 0.65	
	Q.4.	対象者の幸福・安寧のために新たな目標ができた	4.05 ± 0.89		3.95 ± 0.74	
人間関係の広がり（range, 4-20）	Q.5.	活動そのものが楽しめた	4.25 ± 0.91	16.90 ± 2.15	4.39 ± 0.65	17.63 ± 2.65
	Q.6.	仲の良い友達ができた	3.85 ± 0.99		4.43 ± 0.68	
	Q.7.	新しい出会いがあり，人間関係の輪が広がった	4.30 ± 0.66		4.36 ± 0.66	
	Q.8.	対象者や他の職員から様々なことを教えられ勉強になっている	4.50 ± 0.61		4.45 ± 0.66	
人生への意欲喚起（range, 3-15）	Q.9.	「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	4.05 ± 0.76	12.25 ± 1.80	4.03 ± 0.73	12.48 ± 2.06
	Q.10.	気持ちの充実感が生まれた	3.85 ± 0.81		4.21 ± 0.66	
	Q.11.	やりがいが生まれた	4.35 ± 0.67		4.24 ± 0.67	

Mean ± SD.

「汚い－きれい」,「暇そう－忙しそう」，及び「愚かな－賢い」の４対の形容詞については，有意差は見られなかった。

（４）援助観に影響を及ぼす要因分析

援助効果測定スコアは，調査時点の１回しか測定していないため，尺度作成者による中高齢のボランティア活動者257名のスコアと比較した（妹尾・高木，2003）。下位項目でみると，「愛他的精神の高揚」のみ平均値が上回った。

（５）自由記述の分析

１）自由記述の抜粋

PSL 学生が良かったこと，心配なことについて記した自由記述の抜粋を Table 7. に示す。

２）「良かったこと」の語句のまとまり

実務経験に従事して「良かった」ことについてPSL学生が記した自由記述の共起ネットワーク図をFigure 1.に示す。語句「仕事」を中心とするSubgraph01には,「嬉しい」,「大切」,「考える」といったポジティブな語句が結びついていた。また,「体験」を中心とする学びに関する語句を含むSubgraph02, 及び「自分」を中心として「見る」・「知る」といった体験を表す語句を含むSubgraph03とSubgraph01は緩やかに結びついていた。そして，語句「アルバイト」を中心としたSubgraph04には,「介護」,「楽しい」,「職員」といった語が結びついていた。

３）「心配なこと」の語句のまとまり

「心配なこと」についての自由記述の共起ネットワーク図をFigure 1.に示す。「アルバイト」を中心としたSubgraph01には，介助，不安，食事といった語の出現頻度が高く，相互に結びついていた。加えて，語句「日数」を中心とするSubgraph03とも結びついており，少ない，足りる，出勤といった従事期間に関する語句が多く用いられていた。

Table 7.　自由記述（良かったこと，心配なこと）の抜粋

良かったこと	1）このアルバイトでなければ学ぶことができない利用者とのコミュニケーションの取り方，介助の方法など，大学の学びとは違う角度で貴重な体験をしている。 2）アルバイトとはいえ，働くということを経験すると座学では分からなかったことも，次第に「この事か！」と，気づきと共に理解できることが増えてきた。忙しい業務の合間に，質問に対する答えや助言も頂き，とても楽しく働かせていただいている。 3）利用者さんが「変わった」。寡黙な利用者さんが，少しずつ心を開いて，笑顔で話をしてくれるようになった。 4）自分たちアルバイトが食事の準備とかをすることで，少しでも職員さんの負担を減らすことができたらと思う。 5）大学のスケジュールに合せてもらえ，希望休ももらえ，介護の実務経験が積める。 6）二年間アルバイトさせていただき，普通に大学生活を行っていたら，関わることのなかった後輩や年齢の近い職員さん，ベテランの職員さん等，沢山の人と出会うことができた。 7）福祉をするうえで必要となるチームワークの力を養うことができたと感じている。やって良かった。 8）利用者さんの親身になって，楽な状態で過ごしてもらえるように，周囲に気を配れるように，と周りを気にする姿勢になれたことが良かった。 9）施設の方が，やさしく接してくれる。わからないこともすぐ聞ける。相談に乗ってくれて，アドバイスももらえる。
心配なこと	1）食事介助など，自分たちのところはしてないが，他の施設はやっているから同じアルバイトでも差が出てしまうことが不安。 2）まだ，ごはんの盛り付けなど，職員の方に手伝ってもらうときがある。もし，一人でする事になったとき，時間内に終えることができるか，不安。 3）シーツ交換のアルバイトに出る人が少ない。もっと出てほしい。食事介助など，自分たちのところはしてないが，他の施設ではやっているから同じアルバイトでも差が出てしまうことが不安。 4）上級生になったとき，後輩に指導ができるかどうか不安です。 5）あたらしく下級生が入ってきたときに，普段の業務とは異なり，後輩の指導を行うことになった。職員さんではないので，指導がやりにくかった。 6）他の学生アルバイトに対する苦情が，自分のところに来る。対応に困る。 7）休みが取りたいと言いづらい。 8）果たして，1095日所属，540日出勤を達成できるだろうか心配。

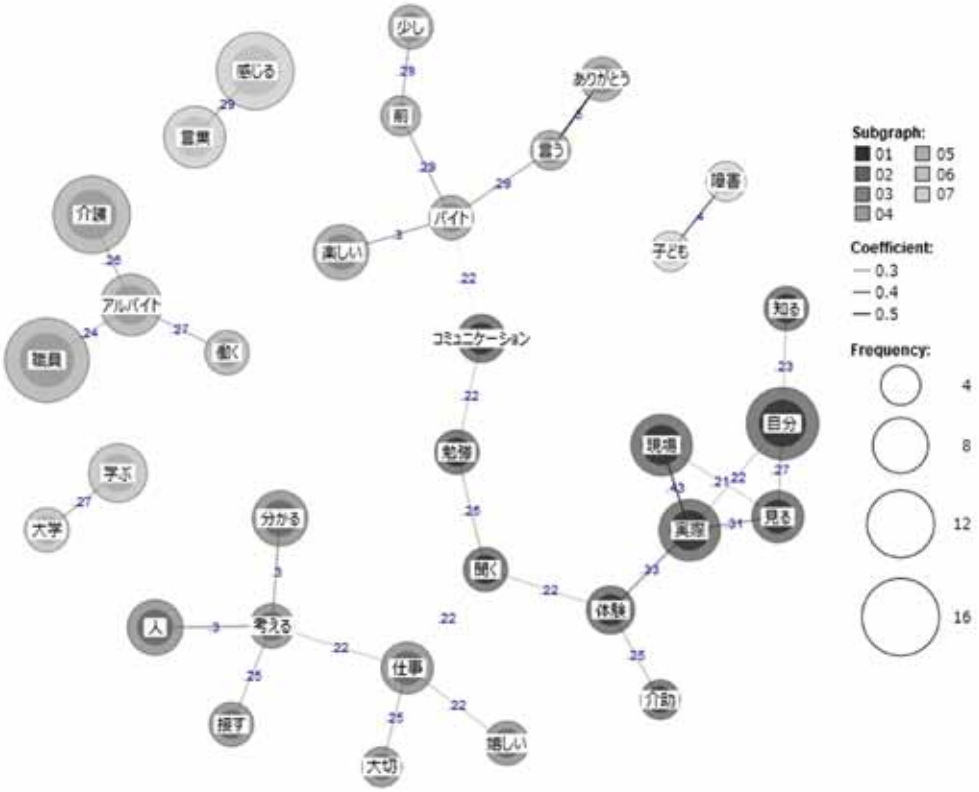

Figure 1.「良かったこと」の共起ネットワーク

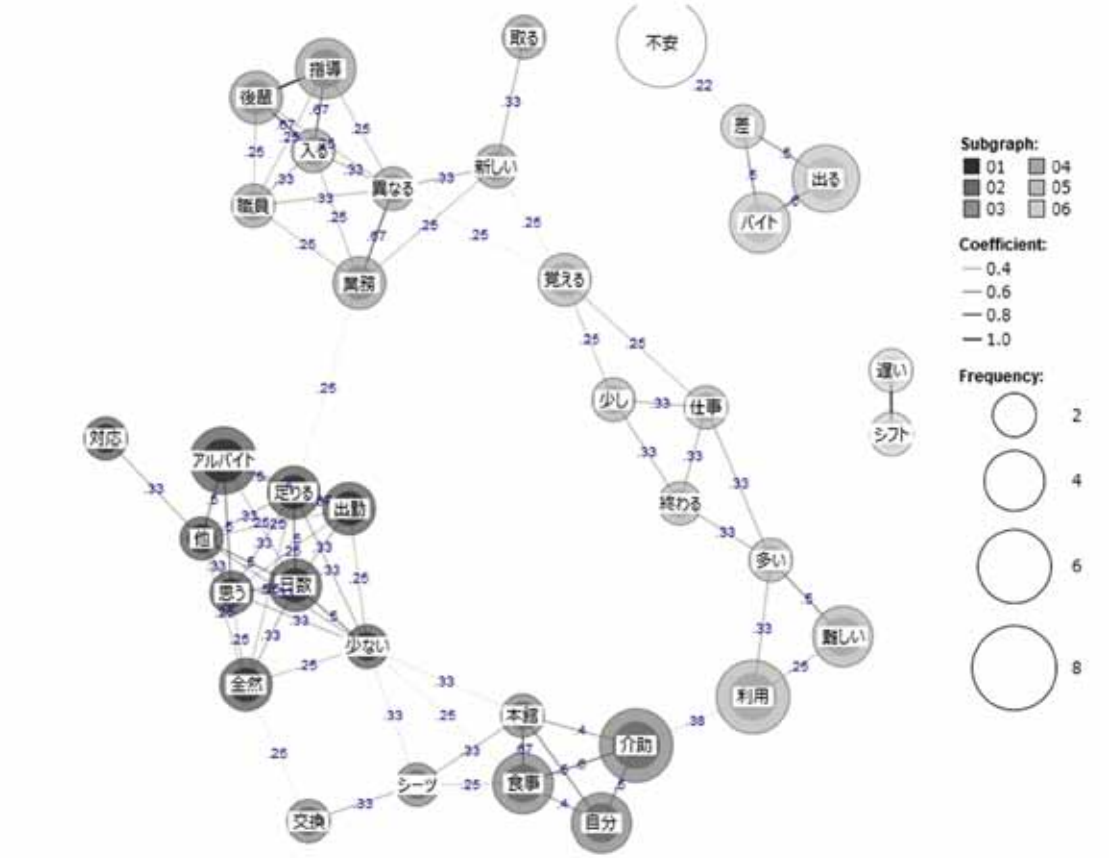

Figure ２.「心配なこと」の共起ネットワーク

また，語句「利用」を中心とするSubgraph02には，難しい，業務，多いといった語句が含まれており，指導及び後輩の語句を含むSubgraph04と緩やかに結びついていた。

４．考察

（1）教育面

たとえ介護経験に乏しく未熟な若者であっても，高齢者に適した支援方法（例：アダプテッド・スポーツ）を用いて関わることにより，対象者の気分状態，健康感が改善されたとの報告がある（河野他，2018; Kawano et al., 2019）。PSL学生には，１年生も含まれていたが，高齢者知識，及びポジティブイメージにおいて，新入生よりも有意に高値であった。また，計量テキスト分析の結果を見ると，要介護高齢者との関わりが，学生にやりがいを持たせ，学業に対する動機を高めていた。このことから，PSLとソーシャルワーク教育には相乗効果があることが指摘できる。PSLの内容は，環境整備や食事介助，コミュニケーション支援といった直接援助が主である。PSL学生が，要介護高齢者を介助するという一方的な関係にとどまらず，学びとやる気を得るという互恵的関係を形成していたことは，PSLの教育的意義を示すものと考える。

（2）学生生活支援

文部科学省によると，全国の大学における中途退学の理由で最も多いのは，「経済的理由」であり，「学業不振」，及び「大学生活への不適応」が続いている（文部科学省，2014）。全国各地の大学において，退学防止が大きな懸案事項となっている。

PSLは，月に33,000円，年間約400,000円の収入につながることから，経済的なメリットが大きい。また，学業との両立が尊重されており，業務

のなかで授業内容と照合できる機会が得られることから，復習予習，大学生活への適応を促進する効果が期待できる。現在，福祉人材確保の観点から，個々の福祉事業者が自法人の事業での就労を条件とした奨学金制度を設ける例が増えている。事実上の給付型奨学金であり，経済的支援として大きな意義があることは間違いない。しかし，自分に合った職場環境，人間関係を志向する現代学生にとっては，実際に働いたことがない事業所への就職を条件とされることにより，閉塞感，及び圧迫感をもって受け取られ，実際の活用につながらない可能性がある。節約・緊縮姿勢が特徴の現代学生は，明らかに客観的利益が大きな制度であっても，不確定な事象及び負担面に着目するあまり，自らの進路自体を狭めてしまう判断・選択を行うことが少なくないからである。しかし，PSLのように実際に実務を経験し，経済的支援を勤務の対価として得られる形にすれば，気兼ねなく取り組むことができる。併せて，社会福祉施設にとって費用対効果は高く，学生にとっては，勤労意欲，及び経済活動における倫理観を育む機会となることが期待できる。

（3）キャリア支援

PSL学生は，医療・介護・福祉分野に対する就職意図スコアが有意に高かった。同分野において，実務経験及び資格がその後のキャリア形成に及ぼす影響が大きい。PSLは，大学教育では手が届かなかった実務経験を得られる機会であり，ブラックバイト問題等，社会経済的に弱い立場に置かれる学生にとっては，社会連携により護られながら学ぶ，次世代育成の新たな手法としての可能性を秘めている。

（4）残された課題

本研究には，次のような限界がある。PSL学生と新入生の比較に過ぎず，PSLの経過によって生じた変化を捉え切れていないことである。特に，援助成果測定尺度を用いたPSL参加前後の比較は，学生の学修動機を高める要因研究につながるため，今後の課題としたい。

5．結論

PSLは，教育面，学生活支援，及びキャリア形成上，有意義なものであった。特に，社会福祉施設と大学とが，次世代育成を主眼とした取り組みとしてPSLを位置づけることによって，社会福祉施設にとっては「地域における公益的な取組み」となりうるし，大学にとっては「社会連携」及び「産学連携」の機会となり，教育の社会実装化に資する有用な取り組みであると考える。公益活動を求められる双方にとって，社会的要請にこたえるwin-winな社会連携の一例として，各地で展開してはどうかと考える。

今後は引き続き，PSLないし社会連携による学修機会の拡大と効果測定を通して，学生と福祉現場の良好な関係作りに力を尽くしていきたい。

謝　辞

本学生に貴重な実務経験の機会を与えていただいている施設・事業所の皆様に，心より深く御礼申し上げます。

参考文献

1）妹尾香織，& 高木修．(2003)．援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果．社会心理学研究，18(2)，106-118.

2）河野喬，加地信幸，森木吾郎，房野真也，& 山﨑昌廣．(2018)．高齢者の Health-related Quality of Life に及ぼすアダプテッド・スポーツ実施の影響：大学生と共に行ったインクルーシブ・ボッチャの実践．人間健康学研究，(1)，43-49.

3）河野喬，森木吾郎，房野真也，加地信幸，山﨑昌廣．(2019)．アダプテッド・スポーツを用いた支援サポーター養成プログラムの検討：エ

イジズム, エンパワメント, 及びソーシャルワークの視点から．人間健康学研究，(2)，in Press.
4）厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室．(2019)．社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて．URL: https://www.mhlw.go.jp/content/000523365.pdf（2019.10.30確認）
5）厚生労働省社会保障審議会福祉部会.（2006）．介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見．URL: https://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/12/s1212-4.html（2019.10.30確認）
6）厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部．(2017)．「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）．URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000150538.html（2019.10.30確認）
7）厚生労働省社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会．(2018)．ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について．URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-hosho_224742.html（2019.10.30確認）
8）今野晴貴．(2016)．ブラックバイト：学生が危ない．岩波書店.
9）佐藤智子．(2017)．CBL（Community-Based Learning）の意義についての一考察：地域や社会で学ぶことはなぜ有効なのか．東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要，(3)，183-190.
10）清水裕士，三浦麻子，稲増一憲，小川洋和．(2018)．「〈実践研究報告〉フリーの統計ソフトウェアHADの多言語化と英語版の作成」『関西学院大学高等教育研究』，(8)，67-73.
11）馬場民生，紺屋博昭．(2017)．御礼奉公，あるいは事業主がする若年者への修学就業支援の法的課題：紛争解決の実態を考えつつ．熊本法学，141，281-303.
12）樋口耕一．(2014)．社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して．ナカニシヤ出版.
13）広島労働局．(2018)．広島県の最低賃金．URL: https://jsite.mhlw.go.jp/hiroshima-roudoukyoku/hourei_seido_tetsuzuki/chingin/_109776/saiteitingin.html（2019.10.30 確認）
14）文部科学省，厚生労働省，経済産業省．(1997)．インターンシップの推進に当たっての基本的考え方．（平成26年一部改正），URL: https://www.aichi-mizuho.jp/pdf/p28/28a_kihon.pdf（2019.10.30確認）
15）文部科学省．(2014)．学生の中途退学や休学等の状況について．URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf（2019.10.30確認）
16）Cress, C. M.（2013）．“What are Service-Learning and Civic Engagement?”. Cress et. al. *Learning through Servicing: A Student Guidebook for Service-Learning and Civic Engagement across Academic Disciplines and Cultural Communities.* Sterling, Virginia: Stylus Publishing.
17）Kawano, T., Moriki, G., BONO, S., Kaji, N., Yamasaki, M. and Muraki S.（2019）. Effects of the boccia as an adapted sport on the Mood states and Health-related quality of Life of elderly women in need of nursing care and assistance. *Jpn J Adapted Spo Sci*, in Press.
18）Mooney, L. A., & Edwards, B.（2001）. Experiential learning in sociology: Service learning and other community-based learning initiatives. *Teach. Sociol.*, 181-194.